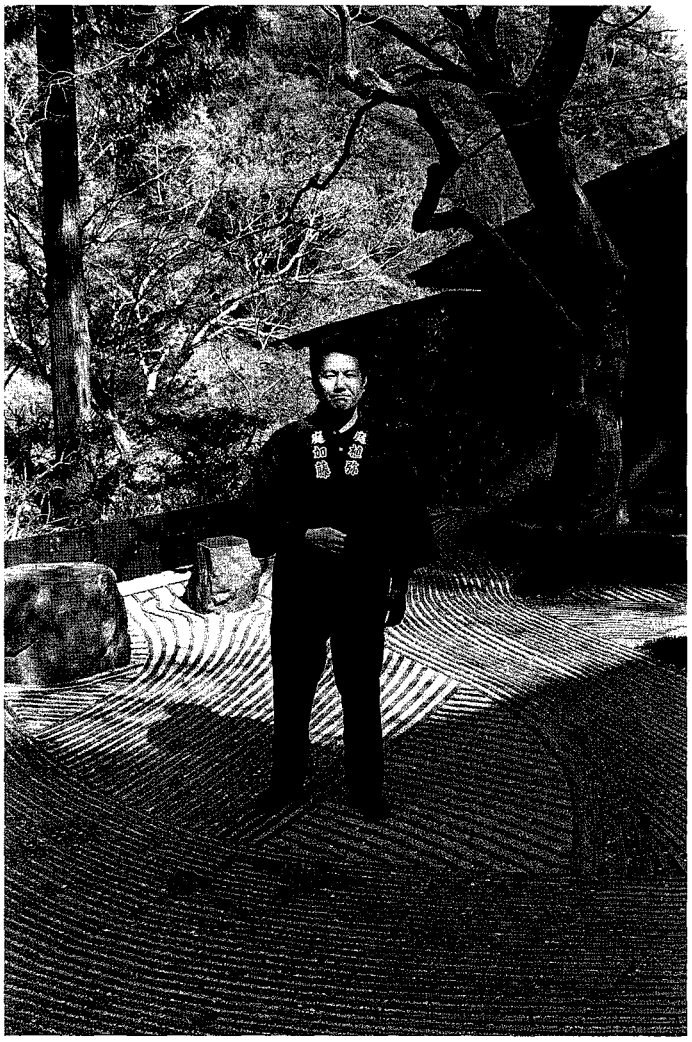
# 関西の建築界／群像

KAN

Kansai Architectural World / “Gunzo”

日本建築協会

# 加藤 友規 —TOMOKI KATO—



星のや京都　「奥の庭」にて

経歴（学歴・職歴）
1990年　千葉大学園芸学部園芸経済学科卒業
1990年　植彌加藤造園株式会社　入社
2012年　京都造形芸術大学　大学院博士課程修了　博士（学術）取得

主な受賞歴
2012年　日本造園学会造園作品選集2012 選定（くろ谷金戎光明寺紫雲の庭）
2012年　日本造園学会造園作品選集2012 選定 京染会館 京染の庭（共作）
2013年　日本造園学会賞 研究論文部門「渉成園の空間的特質に関する研究
ー利用形態と情景の変遷にみる時代性の考察ー」

主な作品
2005年　史跡南禅寺境内 参道修景整備工事
2006年　名勝無鄰菴庭園 滝石組み改修工事
2011年　名勝智積院庭園 護岸石組み修復工事　他

聞き手　神田泰宏（竹中工務店）
写真撮影　河合止揚

**伝統とモダン**

嵐山渡月橋から和船で10分、大堰川沿いの急峻な斜径地にある和のリゾート、「星のや京都」に加藤氏の代表作がある。瓦の小端の連続を川に見立てた地面の紋様と、水磨きした景石をベンチとした石鏡等による「奥の庭」は、従来の伝統的な“観る枯山水”ではなく、利活用できるラウンジ化された枯山水である。この作品には、「伝統的な考え方や手法に、創造的なものが付加され、それがその時代に共感・感動されれば、後にそれが伝統となる」と氏が説くように、伝統とモダンは対立するものでなく、融合することで伝統として継承されるという想いが込められている。

**文化財庭園と公共造園工事**

こうした視野の広さは、経歴からも伺える。“自然体”という言葉がふさわしい出立ちの加藤氏は、「父親が楽しそうに仕事をしていたから」と160年以上続く家業である庭師の道に進むきっかけも「自然だった」と語る。20代には大規模公共造園工事で施工管理を学び、30代には南禅寺をはじめとする伝統的な庭園の修復や作庭を行うなど、幅広く造園業に携わってきた氏にとって、庭師の職能は庭木の剪定といった狭義のそれとはまったく異なる。

**クライアントとデザイナー**

「星のや京都」では、鞍馬石の粉で洗い出しした土間や、鴨川のまぐろ石の延べ段、あられこぼしなど、伝統的な作庭を行う一方で、鉄板敷の坪庭や客室ごとに延べ段のデザイン・パターンに変化をつけるなど、「デザイナーのアイディアを実現する過程で学ぶことも多かった」という。「クライアントだけでなく、デザイナーとも向き合うことは、ひときわ面白い」と、氏はデザイナーとの協創によって広がる造園の可能性にも貪欲である。

**人の視点場と自然の時間軸**

また、庭と人・建築との関わりについて、「いつ・どこから眺める庭なのかという“視点場”を大事にする」と氏は教えてくれた。「星のや京都」での「水の庭」において、宿泊客が自由に利用できるライブラリーからの眺めがまさにその“視点場”であった。一方で、氏は何十年何百年と自然と付き合っていく時間軸も忘れない。数百年以前の庭園を維持する上では、「過去の庭師の意思を現地現物で感じ取る」とした上で、「何十年・何百年後にどういう状態であることを求められるか、ということを考える」という。「見てもらっているのは自然の力、決して出しゃばらない。庭師の仕事は自然との対峙である。」とも語る。

**感性とテクノロジー**

「昔は図面がなく、庭師の感性が出来栄えを左右する時代であったが、テクノロジーが発達し、できることが多くなった今もそれは変わらない」と感性の重要性についても語ってくれた。「暮らしの中で自然と向き合いながら感性を磨いていた昔と異なり、意識して自然と向き合わなくてはならなくなった」と、氏は警笛を鳴らし、後輩たちへの指導・継承も怠らない。

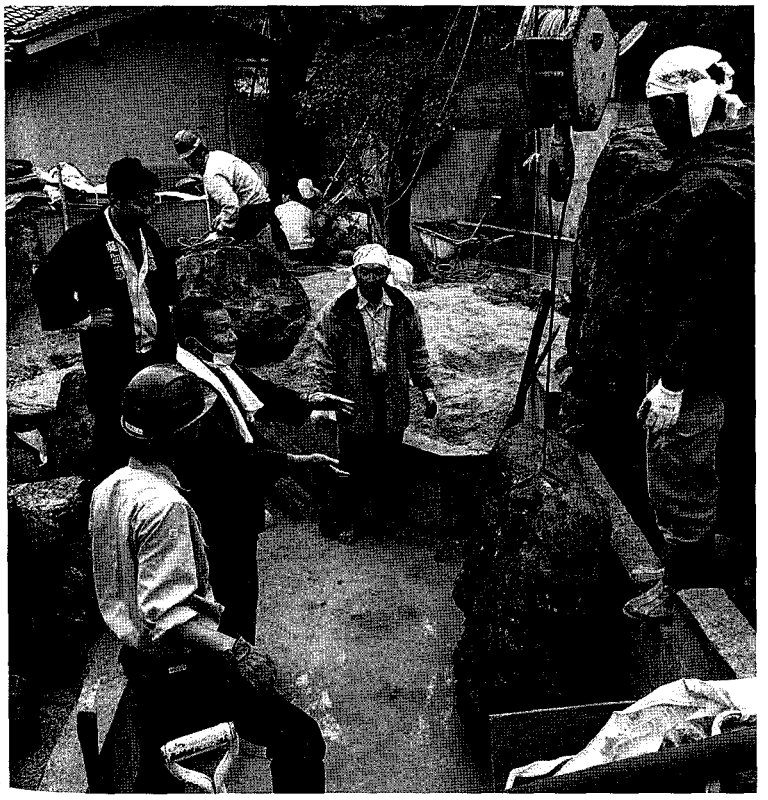
**庭師の業と発信力**

氏は、「父親以前の時代の庭師は、腕は確かだったが、世にその業を発信することが苦手だった」ことから、本業の傍ら、造園学会や庭園学会などの学会活動にも精力的に参画し、庭師の世界の楽しさと奥深さを世に発信している。

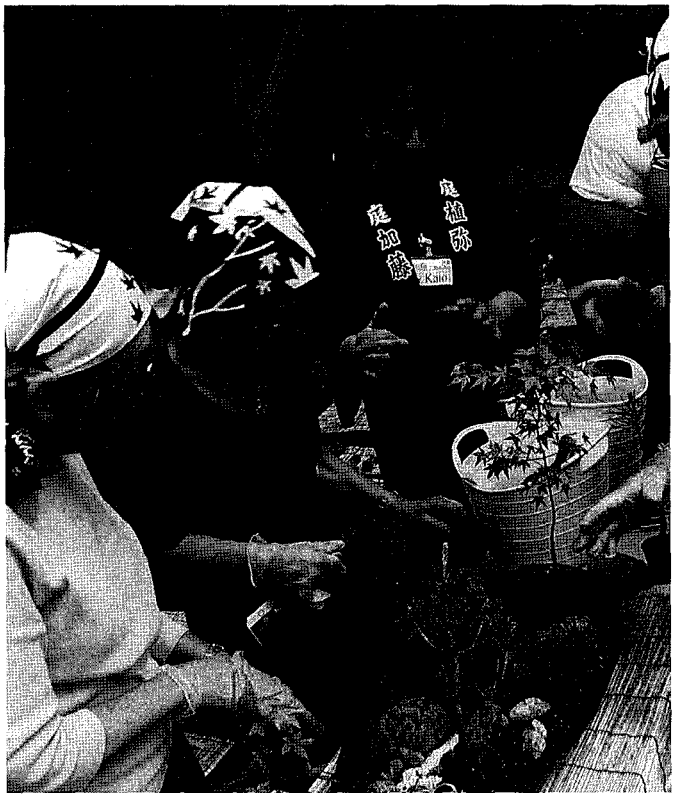
伝統を学び、自然を知り、現代を吸収し、それを発信する。庭師の理想的なあるべき姿を追求し続けている氏にとって、「どちらかといえば○○を重視する」という発想はない。「どちらも」である。建築に関わる者にとっての視座がここにあるのではないかと感じた。

（2013年6月号掲載）

近年の施工ー星のや東京の竣工写真：職人の手仕事を生かすために独自のユニット工法を開発。公共空間の大面積にあられこぼしを敷き詰める前代未聞の空間を実現した。(撮影：半田広徳)



伝統から学ぶ、仲間から学ぶー現場での技能伝達風景：現場や勉強会を通じて、親方と弟子が文章化の難しい感性や美意識の伴った庭師の技能「暗黙知」の共有を常に目指す。




日本庭園文化の普及啓発活動ー鉢庭ワークショップの様子：ワークショプや講演会を通じて、日本庭園の魅力と奥深さを国内外に伝えている。植彌加藤造園株式会社としては2016年度より名勝無鄰菴の指定管理者となり、研究と普及を両立させた運営を行っている。